カイラス巡礼

贖罪と蘇生

夢を見た。地獄の阿鼻叫喚の中で苦しむ私を、お釈迦さまが極楽から見下ろしている。仰ぎ見た私の絶望的な眼と、切れ長の細いやさしげなお釈迦様の眼が合った。

その瞬間である。お釈迦様は「あの者は生前、労苦をいとわず我がもとに巡礼に参ったもの。許してあげよう」とつぶやかれたのだ。美しいお釈迦さまの御手が伸びてきて、もう少しで私の手に届きそうなところで残念ながら目が覚めた。

これはなにかの啓示だと思った。私は今年(二〇〇八年)還暦を迎えた。還暦とは干支(十干十二支)が一巡し、起算点となった年の干支にふたたび戻ることである。十干が一巡する六十年で一つの人生を生ききり、また次の人生を生きる節目である。

ならば何をさておいても、お釈迦様を慕う巡礼の旅に出なければなるまいと思った。巡礼は古来、自分自身をみつめ、再発見し、救済し、蘇生する旅であった。今まで生きてきた人生を、この辺で一度しっかり総括し、積年の罪を贖うのだ。そして、そう遠くない将来に迫っているであろうこの世の人生の終焉に、ぜひとも極楽への切符を手に入れておかねばなるまい。

お釈迦様はいずこに

しかし私の求めるお釈迦様はいずこにおわすのであろうか。お釈迦様を慕う旅といえば、生地のルンビニや覚りを開かれたブッダガヤがすぐ思い浮かぶ。しかし彼の地は、仏教が滅びてすでに久しく、いまやヒンドゥー教の土地柄である。

かつてインドに遊んだとき、ブッダガヤを訪ねたことがある。私はお釈迦様が身を清めたという尼連禅川で沐浴し、覚りを開かれた菩提樹の下で座ってみた。喧騒と猥雑さが支配するインド世界の中で、そこは確かに静寂と安らぎが得られる場所であった。

しかし今の私は、何かもっと激しいものを求めたかった。お釈迦様が苦難に満ちた放浪と思索の末に、悪魔の誘惑を

振り払い、ついに覚りを開いたように、私もまた自らのからだとこころを激しく鞭打ってみたかったのだ。

河口慧海との出会い

私の聖地はどこにあるのか、私はいずこへ旅立つべきか。聖地探しに思いを巡らせる日々は、意外な形で決着した。古本屋の百円均一の棚で何の気なしに手に取った「チベット旅行記」。

本の裏表紙を見ると「ただひとり、ひたすら求道の情熱に身を任せ、明治三十三年、日本人として最初にチベットに入国した河口慧海(かわぐちえかい)。装備も不十分なまま寄せ来る困難をしのぎながらヒマラヤ越えに挑んださまを描く古典的名著」とある。

これだと思った。上下二冊、消費税込み二百十円である。まさにホトケが手助けしてくれたありがたいめぐり合わせとしか思えない。文字通り、寝食を忘れて読みふけり、文庫本で六百ページほどをわずか二日で読了したのである。

川口慧海

河口慧海は三蔵法師がインドに経典を求めたように、チベットの首府ラサに大蔵経の原典を求めて旅に出た。時あたかも西欧列強が虎視眈々とチベット侵略をうかがう時期にあり、チベットは外国人の入国をかたくなに拒絶していた。

ネパールでチベット語を習得するのに三年をかけ、チベット人の僧侶に成りすました河口は、チェックの厳しいラサへ直接入る道を断念し、はるか西を迂回する間道を進んで、チベットに入境する。そこで河口は「天然の曼荼羅雪峰チーセ」と出会うことになる。

「はるか北西の空には、大きな雪峰がそびえている。その峰がすなわちチベット語のカン・リンポ・チェで、インド人のいわゆるカイラス山である。昔の名はカン・チーセと言ったという。その雪峰は世界の霊場と言われるだけあって、ヒマラヤ雪山中の粋を集め、天然の曼荼羅をなしている。その霊山の方向に対して、まず私は自分の罪業を懺悔し、百八遍の礼拝を行い、それからかねて自分が作っておいた二十六の誓願文を読んで誓いを立てた」

「中央に巍然としてそびえている雪峰はすなわちチーセ山で、シャカムニ仏のからだである」

私はこの「シャカムニ仏のからだ」とい

う記述に胸の高鳴るのを覚えずにはいられなかった。もしかしたらこの雪峰チーセ、カイラス山こそ私の目指す聖地ではないのか、そんな思いがむくむくと頭をもたげてきたのである。

釈迦牟尼の化身カイラス山

カイラス山は、中学生のとき以来愛用している「新編中学校社会科地図(帝国書院)」に載っていた。標高六六五六メートル、ヒマラヤ山脈の北、中国チベット自治区西南端、ネパールとインドとチベットが国境を接するあたりにそれはある。

エベレストなどヒマラヤ山脈の高峰と比べれば、標高はたいしたことがないけれども、カイラス山はヒンドゥー教、ジャイナ教、ボン教、そしてチベット仏教のいずれもが聖地とあがめる尊い山だったのである。

仏教徒はカイラス山を仏教宇宙観の中心にそびえる須弥山(しゅみせん)のモデルとみなし、山頂で今もブッダが法を説いていると信じている。またヒンズー教徒は、カイラス山の山頂の形をシヴァの象徴リンガ(男根)とみなし、シヴァ神の住む聖なる山であると信じている。ジャイナ教では初代教祖が悟りを開いたと

ころとされ、ボン教では開祖のシェンラブ・ミボが空から降り立ったところとされている。

十七世紀にチベットで発行された「聖地巡礼案内」には、「この偉大なる宮殿チーセ(カイラス山のチベット名)を一回巡れば、一生にわたって積んだ罪の汚れを雪ぐことができる。十回巡れば、一カルパ(天文学的な長い時間の単位)に渡って積んだ罪の汚れを雪ぐことができる。百回巡れば、この世において仏の位を得ることができる」とカイラス巡礼の功徳が書いてある。仏教徒にとって、カイラスこそ夢の中で私に手を差し伸べてくれた釈迦牟尼仏の化身であったのである。

いざカイラス山へ

カイラス山を一回巡れば、一生にわたって積んだ罪の汚れを雪ぐことができるなら、何を置いても行かねばなるまいと決心した。しかし、ある本に曰く「それは世界一過酷な巡礼路」であり、「その過酷さは想像を絶する」そうなのだ。当然であろう。「一生にわたって積んだ罪の汚れを雪ぐことができる」のだから生易しいはずがない。

あのネパールからヒマラヤ越えをしてきた河口慧海でさえ、カイラスを一周するときの様子を、ヤクの背に乗っていても心臓が張り裂けそうに苦しいと「チベット旅行記」に書き残している。

カイラス巡礼を決意したときの私の心境は、三日月に向かって「我に七難八苦を与えたまえ」と祈った忠臣、山中鹿之助の心境にも劣るものでなかったと断言できる。

ついつい筆が滑って大時代的な物言いになったが、百年前の河口慧海の時代と違って、いまやチベットの首府ラサにはジェット機が離着陸できる飛行場があり、中国四川省の成都から定期便も飛んでいる。日本から成都までは航空機でまる一日。ここで四川料理の麻婆豆腐でも食べて一泊する。ここまで来れば翌朝、わずか二時間のフライトでラサの飛行場に降り立つことができる。

そして最新の地図で確かめたところ、ラサからカイラスの近くを通り中国の西の果て新疆ウイグル自治区のカシュガルまで「新蔵公路」という道が通じている。カイラスのふもとまで千五百キロほどあるが、これも車という文明の利器がある。

とにかく天上の国チベットの首府ラサにたどり着けばなんとかなるだろう、そこから先のことはラサでじっくり策を練ろうと、勇んで旅の準備を始めたのである。

チベット騒乱

外国人が観光で中国を二週間以上

旅行するためにはビザが必要となる。これは珍しいことではない。中国人が日本を観光で訪問するときもビザが必要になる。お互いさまだ。（二〇〇八年現在）。

違うのは中国が自国領であると主張しているチベットに入るのに、チベット入境許可証(外国人旅蔵確認函)という特別の許可を別途必要としていることである。そしてこの許可証はツアー形式の団体旅行客にしか下りない。

しかしこの規則は、最近の中国の改革・開放政策によって形骸化しており、旅行会社が適当に書類を作れば、個人旅行客でもツアー客に成りすまして簡単にチベット入りできると言われていた。

鉄道が開通して、チベットに大量の漢人が流入し、その多くが観光に従事していることを考えれば、あまり厳格に規制を運用していたのでは飯の食い上げになるという現実的な判断であろう。

これが一変したのは二〇〇八年三月にラサで発生した僧侶たちを中心とする「暴動」の影響である。略奪、放火などが発生し、居合わせた観光客が撮った写真やビデオがマスコミを通じてまたたく間に流出し、世界中がラサにおける騒乱を知ることになった。

CCTV COM より

「暴動」は武装警察や軍隊によって、あっという間に鎮圧されたが、中国の人権無視や宗教弾圧に抗議する声は、世界各地で広まった。北京オリンピックを目前に控えた中国指導部は、外国人がこの機会にチベットに押しかけ、人権の旗を振られたのでは一大事と、外国人のチベット立ち入りを禁止してしまった。

とりあえず、くさいものには蓋をしておけという訳である。外国のメディアが目を光らせる中では、不満分子を徹底的に痛めつけ押さえ込むには都合が悪い。飯の種の観光より威信が大事なのである。

チベットへの旅は入り口でつまずいてしまった。まさか河口慧海のように密入国するわけにも行くまい。お釈迦様の慈悲に触れる機会は、当分延期せざるを得ない。私の意気込みが大きかっただけに、落胆もまた激しくならざるを得な

かった。

「過酷な巡礼路」は覚悟していたが、まさか門前払いのように、チベット巡礼の旅を断念せざるを得なくなるとは思ってもみなかった。チベットへの旅は季節を選ぶ。とくに標高五千メートルを越えるカイラス山の巡礼は、雪を避けるならば十月が限度となる。

私は八月に開催された北京オリンピックを意地でも観戦しようとしなかった。「一つの世界、一つの夢」というスローガンがいかに白々しい嘘であるか私は肌で知ってしまったのである。「人々にとって、皮膚の色、言語、人種はそれぞれ異なるが、われわれはオリンピックの魅力と喜びを分かち合い、人類の平和の夢を共に求めるのである」と開会式で誇らしげに演説した胡錦濤主席は、実はチベット弾圧の張本人だったのである。

かつてチベット自治区の共産党書記として胡錦濤は、戒厳令を敷く弾圧政策を実施し、一九八九年三月の反乱を徹底的に鎮圧した。国家主席にまでのしあがったのは、チベットの民族独立を阻止し、支配を強めたことが手柄となっているからといわれている。

再始動

事態が動いたのは、オリンピックが終わった八月二十四日過ぎであった。ＡＦＰ共同電が「チベットへの外国人受け入れ再開」を報じたのだ。容赦ない弾圧で事態を沈静化させて、もう安心と考えたのであろう。

清蔵鉄道開通以来、年間二百五十万人の観光客が、三月の事件以来途絶えたのである。外国人受け入れ禁止が長引けば、観光業者にとって死活問題である。再開に踏み切らざるを得なかったともいえる。

チベット入境証の取得を依頼していた成都の旅行代理店から、インターネットのメイルでＯＫの連絡を受けたのが九月一日。あわただしく旅の荷物をまとめると、私は九月四日の成都行きの飛行機に飛び乗ったのである。成都まで行けばラサまではもう一歩、明日の昼にはラサで昼飯が食えるなどとのんきなことを考え、胸躍らせていた私は、成都のホテルで再び暗澹たる気分に陥らざるを得なかった。

成都で私を待っていたのはラサ行きの飛行機ではなかった。チベットへ入るためには、まだまだ煩雑な手続きが必要だったのである。成都の旅行代理店の職員、魏春姫さんとの会話をかいつまんで以下に記すが、なぜこんな煩雑な手続きが必要なのか、今でも私には謎である。

「チベット入境証が取得できたと連絡を受けている。それだけではだめなのか」

「それは最も基本的な必須書類です。それによってラサ行きの飛行機チケットや、バスチケットを購入することができます。それはラサに入る許可証でチベットに滞在する許可証ではありません」

「この許可証ではラサ以外の場所に行けないということ？」

「そうです。ラサ以外の地区に行くのにはチベット滞在許可証(外国人入蔵旅遊批準函)が必要です」

「わずらわしいね。何でそんな許可証が必要なの？」

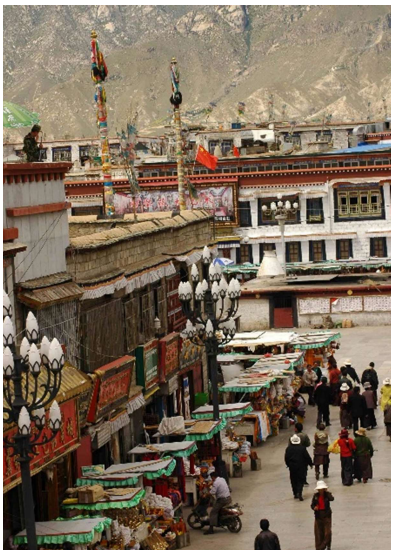
「チベットの特殊な民族伝統や文化遺跡、生態環境の保護のためです。また、チベットの交通状況とホテルなど旅行サービス施設、受け入れ能力などの見地から、外国のお客様に迷惑をかけないための配慮です」

「じゃぁ、その滞在許可証をすぐ手配してください」

「お渡しした書類にカワサキ様の予定を詳しく書いていただく必要があります」

渡された書類には一日ごとの日程と利用交通機関、宿泊場所などを記入する必要がある。そんなことが分かれば苦労はしない。ラサから中国の西の果てカシュガルまで車道がつながっており、その途中にカイラス山があるということを世界地図帳で確認してきただけなのだ。何日かかるか、宿屋はあるか、そんなことが分かるわけがない。

奇手、妙手を使い、チベット滞在許可証を入手するために三日かかった。ラサは、表向きは平穏そうに見えた。しかし大昭寺(ジョカン寺)を取り囲むようにある巡礼路、八角街では、銃を持った兵士がビルの上から人々を見下ろしていた。



ビルの上で銃を持った兵士が監視

ラサで雇ったおんぼろ四輪駆動車に乗

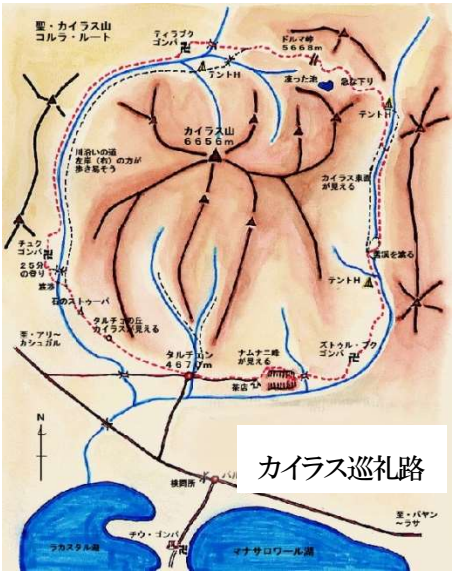
って毎日、沈む陽を追うように西に西にと進み、カイラスの麓にたどり着いたのが九月二十五日。それまでの経緯はとてもここに書ききれないから省くことにする。

とにかく一周五十二キロメートルの巡礼は始まった。空気は希薄で酸素は平地の半分。その道のりは草木さえも生えない岩と雪の荒地である。途中に宿坊も宿屋も一切ない。野宿のテント生活で自給自足だ。雇い入れた荷物運びがテントや水、食料、薪など生活用品一切を背負ってくれている。

老父を背負う息子夫婦、生後三ヶ月の赤ちゃんを抱く二十歳の新妻、インドからバスを乗り継いできたヒンズー教徒の団体、もう既に二百回は回ったと言う生き仏の老婆、千キロも離れた村から馬に乗ってやって来た遊牧民、そしてはるばる日本からやって来た私。

この厳しい巡礼路を、仏教の中で最高の祈りとされる五体投地で巡礼する人も多い。五体投地とは、シャックリ虫のように両手・両膝・額を大地にすべて投げ出し、少しずつ前進する巡礼方法だ。みずから罪を懺悔し、仏への帰依を誓う最高の祈りの形である。

「なぜ？」と誰に聞いても、「来世の幸せのために」と答える。商売繁盛とか病気平癒とか、けちな現世利益を求めるものはひとりもいない。誰もが厳かな仏の化身、天然の曼荼羅を前に、ひたすら仏を讃える真言「オム・マニ・ペメ・フム」を繰り返しながら険しい山道を辿る。



カイラス巡礼路

ドルラ・マ峠(5630m)

巡礼二日目、山は霧に閉ざされた。雪さえ舞い始める。最大の難所は標高五六三〇メートルのドルマ・ラ峠。岩をよじ登り、氷河の端をかすめ、突風に身を屈ませ、ひたすら歩く。心臓が踊

り、呼吸が苦しい。足指が痛くなり、やがて痛いという感覚さえなくなってくる。だが、すべての罪を許してもらい、極楽への切符を入手するのだから、このくらいの苦労は当然であろう。

ドルマ・ラ峠はたくさんの五色の祈祷旗が強風にはためいていた。私も用意してきた白い祈祷旗をその一角に結び付け、こころからの仏への帰依を表明する。その瞬間である。今まで厚い霧に隠されていたカイラスの山頂が突然姿を現したのである。

ドルマ・ラ峠からカイラス山山頂を望む

カイラスは、いや釈迦牟尼は厳かにひかり輝いていた。思わず手を合わせた。あまりのありがたさに、熱い涙が冷たい頬を次々と伝う。喜悦に身が震える。許されたと感じた。積年の罪障を懺悔し、許しを請うた。残された人生を真摯に生きることを誓った。

山を降りた翌日、麓の平原でも大雪になった。あたりは見晴るかす限り白い雪原と変わった。それはこの世の塵をすべて洗い清めるような清浄な雪であった。

fujizakura